

## 戦後台湾の日本語文学

### —黄靈芝「自選百句」の表現—

下岡 友加

#### はじめに

黄靈芝（本名 黄天驥。一九二八—二〇一六）は、創立（一九七〇年）から自身の死去まで四六年にわたって台北俳句会の主宰をつとめた俳人・作家であり、戦後台湾の日本語文学の中心的な担い手であった<sup>(1)</sup>。日本で刊行された『台湾俳句歳時記』（言叢社、二〇〇三・四）の功績により、二〇〇四年第三回正岡子規国際俳句賞を受賞している。

黄は「日本文で表現し易い主題を日本文で取り扱い、スペイン文に適する主題をスペイン文で書く。こう云う使い分けが出来れば文芸はもっと完璧になる性質のもの」だとし、それをなしていないのは「考えようによっては文芸家の恥」だと述べている<sup>(2)</sup>。このような「グローバルな言語観」（フエイ・阮・クリーマン<sup>(3)</sup>）の持ち主である黄は、実際に日本統治下台湾で身につけた日本語、戦後の公用語である中国語、さらにはフランス語と言語を跨いで作品を遺している。また、彼のものした創作ジャンルも詩、小説、短歌、川柳、童話、論説と多

岐にわたるが、最後まで手放されることがなかったのが俳句である。二〇歳で結核を病み、一六年間の療養を余儀なくされた黄は、同じく結核と闘った明治の俳人、正岡子規への共感を語り、「たった一七文字で表現する俳句の世界は、何年たっても究め尽くせない」と述べている<sup>(4)</sup>。黄の俳句歴は、一九五六年二八歳時の台北相思樹会参加にまで遡れば六〇年に及ぶが、磯田一雄は、長期にわたる黄の俳句の展開を次の四期に分類した<sup>(5)</sup>。

第Ⅰ期—『黄靈芝作品集②』（一九七一年）に代表される初期の段階

第Ⅱ期—実験的試みの著しい段階（一九七〇年代後半—一九八〇年代）

第Ⅲ期—台湾季語と湾俳の確立に至る段階（一九九〇年代—二〇〇三年）

第Ⅳ期—正岡子規国際俳句賞受賞（二〇〇三年一月）以後

※引用者注 正しくは二〇〇四年一月以後

右のような変遷は台北俳句会創立以来、今日まで年一回刊行されている『台北俳句集』に確認できる。加えて、黄には個人的な作品集や姉との合同俳句集もあり、二千七百句余りが公にされているが、彼の俳句活動の掉尾を飾るものとして、死の前年（二〇一五年）に日本で刊行・発表された「自選百句」<sup>(6)</sup>がある。黄は晩年、「俳句は日本の先生が開拓した分野だけど、それに巻き込まれるのではなくて、という気持ちがある」<sup>(二〇一三・七・一四インタビュー<sup>(7)</sup>)</sup>と語っていたが、彼は最終的にどのような俳句観に行き着いたのだろうか。黄にとって最後の仕事とも言うべき「自選百句」に関する検討は未だ行われていない。本稿は、戦後台湾を代表する俳人・黄の俳句理念や特徴を「自選百句」の内容・表現の検討を通じて明らかにしようとするものである。

## 一 「自選百句」の出自

まず、「自選百句」の出自を確認することからはじめる。選ばれた句の初出（既出）は、本稿末尾に掲げた別表1「黄霊芝「自選百句」初出・既出一覧」の通りである。この表に明らかなように、「自選百句」は、二〇一〇年刊行の『台北俳句会40周年記念集』（以下『40周年記念集』と略記）収録句を特に前半に集中してそのまま取り込んでいる（『40周年記念集』収録の全30句中、27句が「自選百句」に採用）。同時にそれらの句の多くは、『黄霊芝作品集巻15』（二〇〇〇・一二）、『同巻20』（二〇〇三・一一）、『台北俳句集31集』（二〇〇三・八）

等にも収録されてきたものであり、黄はこの二〇〇〇～二〇〇三年段階での自身の代表作を、二〇一五年時においても同じように高く評価しているということが分かる。磯田は二〇〇〇年を黄霊芝俳句の完成時期とみているが<sup>(8)</sup>、黄自身もほぼ同様の認識を持っていたと考えられる。

ただし、百句全体の初出年代を確認すると、二〇〇〇年以降に発表された句が45句あるとともに、二〇〇〇年以前に既に発表されていたものも44句ある。さらに、その二〇〇〇年以前の初出句を年代ごとにみると、一九七〇年代に発表された句が14句、一九八〇年代が15句、一九九〇年代が14句あり、一〇年ごとにほぼ等しく句が選出されていることがわかる。すなわち、「自選百句」は黄の長い俳句歴をできるだけまんべんなく網羅するような配慮の上、編まれていると言える。

なお、既出が確認できなかったものが11句あり、これらは「自選百句」が発表された二〇一五年段階における新しい句と考えられる。二〇〇〇～二〇〇三年を一つの完成の区切りとしながらも、黄の創作、模索はその死の直前まで続けられていたことをも「自選百句」はあかす。

## 二 リズム — 破調の所以 —

「自選百句」の前に置かれている評論（「はじめに」）において、黄は「五七五にリズムがあるといっても、それでは五七五以外にはリズムがないのか、という問題に出くわし」、「真実にはありとあらゆる音色

にはあらゆる音色のリズムがあると考えの方が正しいだろう」と、五七五は俳句の「定義ではない」ことを論じている。同様の主張は「定型にさほどの価値があるのではなく」「究極的には芸は天衣無縫でありたいと思っているに違いなく、定型による束縛は、云々然々を賄うほどの資格をもちはない」<sup>(9)</sup>と従来から繰り返されている。

実際の「自選百句」における自由律俳句は7句であり、他93句は定型句である(字余りは一部に見られる)。9割以上が定型句であることからすれば、黄は定型の有効性を決して否定していないことになる。では、例外的に破調がゆるされた句とはどのようなものか。まず「自選百句」第一句目が、次のような自由律である。

1 初蟬に雨、雨、雨、雨 (数字は百句中の掲載順をあらわすために引用者が付したもの。以下同様)

定型リズムを破っている「雨、雨、雨、雨」の表現は、雨が決して一時的なものではなく、しばらく降り続いていることをあらわしている。また、「雨」という漢字自体の象形並びに三つの読点のかたち自体が、雨の滴を視覚的に想起させるものとなっている。夏の到来を告げる初々しい蟬の声が聴けたと思いきや、そこに容赦なく雨が降り続いているというのである。そのような雨の過剰、非情をあらわすのに雨三つでは足りず、四つの繰り返し及び読点が必要とされたのだと考えられよう。破調はその結果としてある。雨中で自身の登場を知らせるがごとく懸命に啼く蟬の健気な様子と、そんな蟬への愛しさ、慈しみが感じられる句である。続く「自選百句」第二句目も蟬句・自由律で

ある。

## 2 蟬閉ざす教室の窓一、二、三、四、五……

この2の句に関しては説明が付されており、「そもそも教室の窓は偶数個あるものだ。ゆえに一、二、三、四、五、六でないとは棲が合わない。だが違うのだ。件の蟬、窓が五つ閉ざされた時点で教室からすでに脱出していた」とある。仮に定型のリズムに則れば、下五を「一、二、三」の五音でとどめておくという方法もありえた。しかし、それでは蟬をめぐる教室内の騒動(劇)としての動きと時間が不足すると判断されたのであろう(なお、この句の場合、上五中七は守られており、下五も仮に中国語音で読めば調子はほぼ定型に近い句となる)。

この句の初出は「蟬閉ざす教室の窓一、二三四五六」(『黄靈芝作品集巻20』二〇〇三・一二、『40周年記念集』二〇一〇・一二)である。窓がすべて閉められ、蟬が教室内に閉じ込められてしまう初出形よりも、生徒や教師の意に反して蟬が逃げてしまったという2の句の方が、より印象深く余韻を残すものと言えよう。また、2では新たに読点が三つ加えられ、窓が順に閉められていく様子が、より動的にリズムカルに表現されている。さらに、句の末尾の「…」が窓から逃げ出した瞬間の蟬の軌跡や、蟬を失った教室の喪失感、失望をあらわしていると読める。この句も定型をあえて破ることで内容的により豊かな詩的世界を生んでいる。その他の「自選百句」の自由律には、次のように漢詩の対句を思わせる、二物を並列させた構成の句がある。

8 一丁目一番地 大鉄門に御所桜

9 表門ブーゲンビリア裏備へイカダカズラ

8は、はじめりの地番と門と桜というモノを並べたに過ぎない句であるが、いかめしい門構えを持つ邸内に、由緒ある堂々とした桜が豊かに咲き誇っている様子が想起される。各単語の頭に置かれた「一」「二」「大」「御所」という語の担うイメージが効果的に作用しているように。

9は家の表と裏に植えられたそれぞれの植物（原種は同じ）から、住居にも華やかな〈表の顔〉と、防犯に重きを置く〈裏の顔〉の両面があることを端的に示した句である。視覚的にも漢字とカタカナの対照が効いている。合理的・機能的によく考えられた植物と人との共存の佇まいに美が見出されると言えようか。

黄は「俳句は「二つの物」でつくる詩なのである」（10）、「詩は基本的には二物の衝撃により生まれる」（11）と明言している。この理念自体は極めて一般的な把握であるが、詩を生み出すに必要な二物の取り合わせにおいて、句全体を二分割しうるような対句構成を行っている点に、日本の俳句にはまず見られない黄の独創がある。この8、9や先の1は活用語を全く含まず、名詞と助詞のみから成るという点でも特徴的な句であるが、逆に、次のような散文的な自由律句もある。

21 盲人とすれ違った蝶にも蝶とすれ違った盲人にも一瞬があった

盲人と蝶、両者が互いに互いを意識する、すれ違いの「一瞬」がスローモーションの映像のように捉えられた句である。初出は散文詩「蝶」（『黄霊芝作品集巻6』一九八二・五）であったが、その一節を独立させて「自選百句」に収められた。俳句の定型からすれば字数超過も甚だしいが、「盲人とすれ違った蝶にも」「蝶とすれ違った盲人にも」の部分はそれぞれ一五音に揃えられていることには注意すべきである。この21同様に、次の句も初出を散文詩とする（初出の題は「エレベーター」）。

19 八階へ上がって行ったエレベーターがなかなか十二階から降りて来ない

右の句には「待つとはこのようなことだ」との説明が付されているが、誰もが一度は経験したことがある、焦れたい時間、思いが具体的な数字（階数）の提示により、滑稽味を伴って表現されている。定型からすれば、この句も大きく字数をはみ出すが、「エレベーター」の直後で切った場合、五・七・六／五・七・六という同一の音数で成り立っている句である。「五七五以外にはリズムがないのか」「あらゆる音色にはあらゆる音色のリズムがある」という黄の主張は、右のような破調の句のなかに実際に追求されていると言えよう。その他の自由律「58 センノサイド千錠入 ままよ颯兆す」「97 ひそかなるものに芽、芽、喪」両句については後述する。

### 三 季語 — 日本十台湾という複眼 —

次に、季語について検討する。百句中、無季俳句は先に見た1句のみ（19 八階へ上がって行ったエレベーターがなかなか十二階から降りて来ない）である。黄は「自選百句」の「はじめに」で「季語の虜になってもおりません」と断言し、別のところでも「季語とは一体何であるうか。俳句の季語 — その必然性について — 結論から先にいうと、実は私にはかなり懐疑的なのである」<sup>(12)</sup>と述べている。『台湾俳句歳時記』の著者とは思えない、季語に冷淡な発言であるが、実際には「自選百句」中、99句が有季俳句である。この数的事実からすれば、季語が有意義な表現要素と黄に考えられていることは、まず疑いない。おそらく黄としては、季語という既存のことに安易に寄りかかって作句するのではなく、あくまで自身の詩を立ち上げるための一部(道具)としてそれを利用すべきという、表現上の主従を明確に主張したいがための先の言かと考えられる。

「自選百句」99句の季語のうち、台湾季語を採用しているものは30句、従来から存する日本季語を採用したものが69句であり、内訳は別表2「季語の分布」の通りである。なお、ここでいう「台湾季語」とは、『台湾俳句歳時記』所収の「台湾独特の季題」並びに日本季語と「名称は同じか似ていても内情の異なるもの」<sup>(13)</sup>を指す。

日本季語（特に夏）の使用数が多いのは、蟬句が19句収められていることによる。従来から存する季語のため、日本季語と分類しているが、亜熱帯及び熱帯気候の台湾では、蟬が日本同様、あるいはそれ以上に身近な存在であることは言うまでもない。蟬は先にも見た通り、

「自選百句」の最初に連続して配置されるなど、黄の好みの題材である。蟬は『黄霊芝作品集巻2』（一九七一・一〇、散文詩）からとりあげられており、その後も『同巻6』（一九八二・五、散文詩）を経て『同巻20』（二〇〇三・一一）には「蟬三百句」（実際には446句）が収められている。磯田は蟬を「黄霊芝の死生観を代表する表現の対象」と位置づけている<sup>(14)</sup>。

しかし、「自選百句」に収められた蟬句の場合、はかない生を主題とするものよりも滑稽句の採用の方が目立つ。たとえば、「3 山さ来て蟬なん知らぬギター搔」、「22 岩ありて蟬あて芭蕉どこかに居」、「25 耳に蟬マラソン走者走らねば」などである。逆に、『台北俳句集29集』（二〇〇二・一一）及び『黄霊芝作品集巻20』（二〇〇三・一一）にともに収められていた「手に蟬を握るは命握りけり」「空蟬の朽葉湿りの中の墓所」など、蟬を通じて直接的に死生観を思わせるような句は「自選百句」に選ばれていない。

蟬句以外にも、二〇一五年発表時の新しい句は「20 父ちゃんじゃないんだってば守宮の死」、「33 男あて呼べばキツネや峠茶屋」、「47 ガーリック洋語は臭くなかりけり」、「58 センノサイド千錠入 ままよ颱風兆す」、「60 神豚も義民の畜も福の相」、「64 入婿も蟬もなかなか夕暮れず」、「72 四月馬鹿ししゃもはオスも身籠もれる」などと、多くが滑稽的要素を持ち合わせていることからすれば、「自選百句」をよく黄の俳句観自体が、端正で真面目な句よりも、諧謔性を持つ句の方を優先させる価値観のなかにあったと指摘することもできよう。

なお、初出と比較した際、日本季語から台湾季語、逆に台湾季語から日本季語に改められたものが確認できる。まず、日本季語↓台湾季

語に改稿されたのは次の二句である。

- ・ 蟬鳴きて後干泣く子となりゆけり（『黄靈芝作品集巻20』二〇〇三・一二。季語を示す傍線は引用者が付した。以下同様）

←

- 44 後干泣く子となりゆけり船を焼く

- ・ 竈食する御坊溜り花の雨（『台北俳句集24集』一九九七・三、『黄靈芝作品集巻15』二〇〇〇・一二）

←

- 54 竈食する御坊溜り基隆雨

44の「船を焼く」は「焼王船、送王船、送王爺、王爺祭」は『台湾俳句歳時記』の「暖かい頃」に収められた季語である（15）。改稿前の句では、「後干泣く」（泣き声がだんだんと小声になっていく）理由が蟬の声にあったが、それよりも「船を焼く」と付けた方が詠まれる景が格段に大きくなると考えられての改稿であろう。子の泣き声が小さくなっていくこと自体が目の前で焼かれる船、祭の迫力を間接的に物語っており、季語の下五への移動も加わって、単純に因果関係を説く改稿前の句に比べて優れている。

- 54には「基隆は雨の名所。竈食するとは竈の側で食事をする」と

との説明が付されている。場のイメージを伴う季語「基隆雨」の採用により、想起される映像はより具体的、鮮明になっている。また、改稿前の春の季語「花の雨」には華やかさがあり、竈食する行為との齟齬があったが、「寒い頃」の季語「基隆雨」への改変により、喚起される情景は侘しくつましやかなものへとイメージが統合された。

逆に、台湾季語↓日本季語へと変更されたのは、次の句である。

- ・ 竹鶏鳴く逢ふさ離るさの古参道（『台北俳句集21集』一九九三・二、『台湾俳句歳時記』二〇〇三・四）

←

- 34 蟬幾世逢ふさ離るさの古参道

竹鶏とは、冬に結群し、「筒抜けの大声」で鳴く、台湾全島の低海拔地に分布するキジ科の鳥のことである（『台湾俳句歳時記』参照）。「寒い頃」の季語である竹鶏を用いる原句のままでも、古参道の閑けさ、淋しさが伝わってくるが、改稿句はおそらく「逢ふさ離るさ」という表現をより生かすことを目論んだものと考えられる。34では、人々の出逢いと離別の舞台となってきたであろう古参道の知る時間の長さ、大きな時間の流れが「蟬幾世」によってより強調され、句の示す感動の中心が絞られた。

言うまでもないことだが、季語396項目と解説・例句から成る『台湾俳句歳時記』を編むだけの力量を持つ黄は、従来から存する日本季

語に通曉している上、台湾季語という持ち札をも手にしている。台湾の日本語俳句について、ともしればそれを日本国内のその傍流・亜流のように軽視する見方があるが<sup>(16)</sup>、言語(日本語)の表象可能性からすれば、事態はむしろ逆であろう。台湾季語と日本語を交換して句を練り上げる黄のような作句の手立ては、日本語しか知らない俳人には到底不可能な術なのであり、表現はより広い可能性の領野で模索された上で、最終的な定着をみているのである。黄は日本語+台湾季語といういわばハイブリッドな複眼によって世界をまなざしている。その「異種混淆化」の発端が戦前の(帝国)日本による植民地統治にあり、「けつして幸せなものでも、同意にともなわれた多様な文化の混合でもないということ」(ホミ・K・バーバ<sup>(17)</sup>)は重々承知しておかねばならないが、黄は自らの置かれた言語環境を逆手にとって、自身の表現・認識世界を拡張した。一つの焦点からなる円形よりも、二つの焦点を持つ楕円形の方が、その孕む世界は大きい。仮に円形しか知らぬ者には楕円形がいびつに見えたとしても、である。ここに黄の言う「俳句は日本の先生が開拓した分野だけど、それに巻き込まれるのではなくて」という自負を支えるだけの確かな拠り所、力の一端が確認できる。

#### 四 音調重視、会話体の活用——自由自在へ——

「自選百句」は次のような四句で結ばれている。

- 97 ひそかなるものに芽、芽、喪  
 98 颯去りて林の奥の奥に人  
 99 上つ文文箱に齊女子が目に  
 100 寒雀寒銅像にお相伴

これらの句に共通しているのは、いずれも同じ音を繰り返すという音調への高い意識である。97の句は初出(『台北俳句集5集』一九七六・一)では、「芽、芽、喪の裏戸」(傍点は引用者。以下同様であったが、それを「芽、芽、喪」とより簡潔に指示内容を示し、m音から成る音を三つ重ねて言い切りとした。句全体を引き締めて「ひそかな」ものをいう内容によりふさわしい音調に整えられている。また、「芽」(「植物の生」と「喪」(「人間の死)」という一見全く異なる現象を、それぞれ一音で「ひそかなるもの」と把握し提示してみせるという、独創性の高い発想・表現の句でもある。

98 は台風一過の後、林の奥から思い出したように人が出てくる様子が目に見え、浮かぶ句であるが、「奥」の音の繰り返しに加えて、「奥」という漢字自体に(「奥の奥」には)「人」という文字が読み取れるという、遊びの要素の存する句である。99 (「うえつふみふばこになずなめこがめに」)は、細かな音の重複([u][ra][ko][me][ni]を二回ずつ繰り返す)による言葉遊びと、内容上での対照(皇族ゆかりの上つ文は室内の文箱に仕舞われ、女子は野外の齊に夢中)によって成立した句である。

100の句は「寒銅像」という造語が「寒雀」（傍点、引用者）という季語と並べられることによって、音の響きの繰り返しを生んでいるだけでなく、「寒」の字の連想から、淋しい雀と淋しい銅像の姿、銅像の冷たい感触が想起される。しかし、その銅像の足元で雀が餌を置いて啄む姿を「お相伴」と見立てた下五により、優しい句に仕上げられている。「寒雀」「寒銅像」というお揃いの言葉が、仲間としての両者あらわすにいかにもふさわしい。このように、最終部に置かれた四句はいずれも音調への高い意識に支えられている上、内容・表現面でも独創的な句が配列されており、黄の「自選百句」を締めくくるにふさわしい結びと言えよう。なお、音への意識は、次のような会話体の積極的な活用にも見てとれる。

20 父ちゃんじゃないんだってば守宮の死

31 長いものおじやるで峠気いおつけ

58 センノサイド千錠入 ままよ颱風す

73 爽やかや<sup>か</sup>あの子もこの子も巢立ちます

20は守宮を父と勘違いした子どもを論ずことばであろうか。稿者には明確な意味の分からぬ句であるが、くだけた会話体と奇妙な付け合わせがおかしみを生んでいる。まさに「滑稽には表象の突飛な聯結がある」（小宮豊隆<sup>18</sup>）という一例であろう。31は茶店のおばあさんの旅人への、あるいは出かける孫や息子に対する言葉であろうか。長い

もの「蛇に気をつけるよう注意を促す内容であるが、「おじやる」といった古めかしいことば遣いと「気いおつけ」といった間延びした調子が、山奥であろう舞台の長閑さや発話した人の親切心を感じさせる。58のセンノサイドとは「便秘の薬」という説明があり、台風来訪に備えて便秘薬を千錠買うという決断が詠まれた句である。この思い切った買物の様子が、「ままよ」という自棄気味の一言に集約されており、破調のリズムもその行動・決意の勢いをあらわすにふさわしい。73は卒業式の様子であろうか。「かや」の字体の大きさを変えて爽やかさをこだまのように表現し、「巢立ちます」という丁寧な報告体の文末表現が、子どもたちの旅立ちを一層爽やかなものとして強調している。

これらの四句は31を除いて、すべて「自選百句」新出句である。一九七〇年から毎年刊行されてきた『台北俳句集』所収句を見ても、このような会話体の採用は黄がごく近年になってから見せるようになった方法であり（『台北俳句集37集』二〇一一・九）以後、連続的に見られる、六〇年の作句歴を持つ黄をして新しい試みと言える。確認した通り、諧謔、軽妙、柔らかなさを生み出す効果が大きい。

さらに内容面で言えば、20の父と守宮のように、自然物と人間を全くの同列に位置づける世界観が黄の句には顕著である。先の100の雀（動物）と銅像（人間を模した人工物）、97の芽（植物）と喪（人事）も同様である。その他にも、「3 さ丹塗りの頬は役者や帝雉」の役者に見立てられた雉、「21 盲人とすれ違った蝶にも蝶とすれ違った盲人にも一瞬があった」の盲人と蝶、「23 深草少将といひ蟬といひ」の少将と蟬、男がキツネの化けた姿であったことをいう「33 男あて呼

べばキツネや峠茶屋」、「60 神豚も義民の裔も福の相」の豚と民、「64 入婿も蟬もなかなか夕暮れず」の婿と蟬など、人間と人間以外の生物、自然がごとく同じ扱いの中にある。

このように、人間が自然物の一部というよりも他の生き物同様の場に置かれ、かつその状況があくまでも軽やかな調子で語られている点に、黄作品の特徴がある。たとえば20では「守宮の死」が、97では「喪」が言明されているにもかかわらず、そこには深刻さや暗さが無い。また、23の「深草少将といひ蟬といひ」も両者の共通点、早すぎる死をいわんとする句であろうが、愚痴のようなくだけた語り口のために、軽妙な印象の句となっている。そうした力みのなさは、芭蕉の句を踏まえていると考えられる、次の二句にも顕著である。

いざ行む雪見にころぶ所まで（松尾芭蕉『笈の小文』一七〇九年）

←

2 雪を見にピアスをつけに戻ってまで

閑さや岩にしみ入蟬の声（松尾芭蕉『おくのほそ道』一七〇二年）

←

22 岩ありて蟬みて芭蕉どこかに居

2は、降雪自体が珍しい台湾の風土をあらわした句である。芭蕉の句も「ころぶ所まで」と俳諧性を含むが、2ではピアスという装身具から行動の主体はおそらく若い女性と推測され、その癖びが生き生きと、おかしみとともに伝わってくる句となっている。22では芭蕉を句

中に直接登場させているが、岩と蟬と芭蕉（人間）が同列に並べられており、ここでは俳聖ももはや形無しの扱いである。また、「岩」「みて」「居」とi音を三度繰り返すという遊びの要素もある。

以上のように、「自選百句」は一貫して音調を重視し、内容面でも生真面目一方の固さや人間中心主義を脱した価値観が目につく。一方で、しんみりとした情緒を詠む句もあり（「16 裸木の鉄となりゆく岨の風」37 島に紫蘇野生えて戦史はるかなる」48 亡き父と居れば城址のかぎろえる」76 瘦田に早もつとも佇めり」92 塵労の貌を写して水澄めり」95 夜を起きて衣重ぬれば亡母在りぬ」など）、真面目な句から遊びの要素を含む句まで「自選百句」の孕む表現世界の振り幅は大きい。

千野帽子は現代の「俳句というゲームの競技場」の拡大を「事実上、なんでもあり」と総括しているが（19）、そうした方法の自由自在、融通無碍への志向を一人の俳人が体現してみせた場、それが黄霊芝「自選百句」と言うこともできよう。

### おわりに

単一的な傾向の把握を拒絶するようなバリエーションを持つ「自選百句」であるが、ここに見える動かしがたい黄の俳句観、俳句の特徴は大まかに次の三点にまとめられる。

①リズム↓定型句が大半を占めるが（93%）、詩を生むに必要な二物

の取り合わせや独自のリズムを実現しうる場合、五七五から大きく逸脱する破調もゆるされる。

② 季語↓有季を基本とし(99%)、特に蟬句(19%)への愛着が顕著である。台湾季語と日本季語の両者を入れ換えて改稿を行うなど、台湾+日本という複眼に支えられた、日本の俳人にはまず不可能な、幅広い表現と認識方法が見られる。

③ 音調↓同音の繰り返し、会話体の積極利用など、音調への高い意識がある。自然物と人間を同等に位置づける世界観とあわせて、遊びの要素を含んだ諧謔、軽妙、柔らかな句が多く見られる。

また、「自選百句」には、形式の類似、同一或いは反対の意の季語使用のために続けて配列されていると考えられる、次のような句がある。

- 1 初蟬に雨、雨、雨、雨 | 2 蟬閉ざす教室の窓一、二、三、  
四、五…  
8 一丁目一番地 大鉄門に御所桜 | 9 表門ブーゲンビリア裏備へイカダカズラ  
28 かなかなや帰りを急ぐ日雇女 | 29 ひぐらしや娶りの村の夕長き  
30 花疲れ姑疲れ峠茶屋 | 31 長いものおじやるで峠気いおつけ

34 蟬幾世逢ふさ離るさの古参道 | 35 御社とあれば蟬麻呂朝臣あて

43 父無し泣寝入りぐせ王爺祭 | 44 後干泣く子となりゆけり船を焼く

50 遠雷に明るき鏡眉を引く | 51 妻に妻戻す遠雷川遊び

55 犬を轆く春宵一刻千金子 | 56 新婚の耳輪小重き花曇

64 入婿も蟬もなかなか夕暮れず | 65 難産の蟬と力みてゐて凡夫

82 『書・牧誓』山家居留守にして日長 | 83 円高のまだまだつづき日の短か

さらに百句中には、亡き母(95)、亡き父(48)、姉(14)、妻(51、84)、娘(62)、婿(64)と家族が一通り登場している。本稿では「自選百句」自体の配列意識にまで目配りすることができなかった。選句した百句全体を再構築し、有機的に編もうとした黄の方法の詳細については、今後の検討課題としたい。

## 注

『台北俳句集』『黄霊芝作品集』からの引用の際、旧字はすべて新字

に改めた。

- (1) 台北俳句会は黄の逝去後は主宰を新たに置かず、会員によって現在も存続中である。戦後台湾の日本語文学の場としては、台北俳句会の他にも、台湾歌壇（一九六七年創立）、台湾川柳会（一九九四年創立）などがある。
- (2) 「序にかえて」（『黄霊芝作品集巻3』一九七二・五）。その他、同様の言に次のようなものがある。「日本人が日本語で詩をつくり、中国人が中国語で詩をつくることは、それが当然の成り行きであるというものの、各々の語言にそれぞれの長所と欠点がある以上、主題に応じてこれを使い分けることも、文芸家の責任のうちだと思われる。民族のいかんによって詩のもつ主題の異なるわけもなく、かてて加えて、かりに日本料理屋の板前が日本料理以外にその素材を生かし得なかったとしたら、それはもはや「〇〇の一つ覚え」としかいいようがないだろう」（俳句について）『黄霊芝作品集巻6』一九八二・五）、「（…）言語には表現能力の差とその限界があり、文芸上の完璧さを念願する場合、この題材はスペイン語で物し、この主題はアムハラ語に限る、といった事態が必ずや起きるはずでありながら、その使いわけを私たちがなし得ないでいるのは、脳みそが一・三キログラムぐらいしかなからであり、霊長の誉れにはとてもそぐわない」（戦後の台湾俳句―日本語と漢語での―）『台湾俳句歳時記』言叢社、二〇〇三・四）。
- (3) 林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』（慶應義塾大学出版会、二〇〇七・一一）
- (4) 「非親日家」台湾人の俳句の会を主宰・魅せられた17文字（『朝日新聞』朝刊、二〇〇七・二・一）
- (5) 「黄霊芝俳句の展開過程―「台湾俳句」に向かうものと超えるもの」（『天理台湾学報』一七号、二〇〇八・六）
- (6) 黄霊芝著・下岡友加編『戦後台湾の日本語文学 黄霊芝小説選2』（溪水社、二〇一五・六）
- (7) 台北市の黄霊芝自宅にて聞き取りを実施。この日の聞き手は、下岡のほか、杜青春（台湾川柳会代表、台北俳句会会員）、三宅節子（台北俳句会会員）であった。
- (8) 注5に同じ
- (9) 「台湾の俳句―その周辺ほか」（『国文学解釈と教材の研究』二〇〇五・九）。その他にも、「五七五という定音律のほかに、それぞれの内容によりマッチした幾つかの音律が許容されてもよかるう」（「あとがき」『台北俳句集7集』一九七八・二）など同様の主張が確認できる。
- (10) 「自句自解」と「短歌」の半分（2）（『燕巢』一九九〇・三）
- (11) 「戦後の台湾俳句―日本語と漢語での―」（『台湾俳句歳時記』注2に同じ）。その他にも「（…）俳句は詩である以上、少なくとも二つないし二つ以上の名詞が必要である。名詞は「物」または「事」であり、それが「組み合わせられる」ところから詩が生まれるものだからである」（「あとがき」『台北俳句集17集』一九八八・八）など同様の言及がある。
- (12) 「あとがき」（『台北俳句集13集』一九八四・七）
- (13) 「台湾歳時記と台湾季語」（『台湾俳句歳時記』言叢社、二〇〇三）

・四)

(14) 注5に同じ

(15) 一つ前の「43 父無し泣寝入りぐせ王爺祭」も同じ季語を持ち、そこに「王爺は崇神。台湾西南部沿海漁民の信仰を集める。何年かに一度船を建造し、浜辺でこれを焼き、灰を海に流す。厄を祓うためである」と『台湾俳句歳時記』の解説を端的にまとめた説明が付されている。

(16) 黄は自身の経験を次のように述べている。「われわれ一群の外国人が、日本人と何ら変わりのない純粹な日本語で（時には日本人以上に純粹な日本語で）短歌や俳句をつくったりすると多くの人はまず目を瞠ってびっくりする。そして——大抵はそれでお仕舞いである。／つまり、われわれの作品は作品として取り上げられる前に、単なる『日本趣味』として片付けられてしまいがちなのである。事すでに『趣味』であるからには、とても本場物にはかなわない、という先入意識が誰の胸にもあるからであろう」（『地声』『台北俳句集9集』一九八〇・二二）。また、続けて「少なくともわれわれは九官鳥のように他人の声音を真似るよりは、地声で己の歌をうたった方が、その道の玄人には快く耳に響くことを知るべきであろう。台湾という風土の中に生息しているわれわれが、いたずらに吉野桜や盆踊りに見惚れ、刺身や蒲焼きをのみ食べたがったとしたら、折角、台湾に住んでいる意義がなくなろうというものである」という、あくまで台湾を主体とした表現の追求が主張されている。

(17) 磯前順一、ダニエル・ガリオア訳『ナラティブの権利 戸惑い

の生へ向けて』（みすず書房、二〇〇九・八）

(18) 『夏目漱石』（岩波書店、一九五三・八）。引用は『夏目漱石（上）』（岩波書店、一九八六・一二）に拠った。

(19) 千野はここでいう「ゲーム」とは「言葉へのリスペクト」と呼ぶしかないもの」とも述べている（二〇〇分で誤解できる近代俳句。文藝ガーリッシュ・俳句の楽しみを奪い取るために）（『ユリイカ 詩と批評』青土社、二〇一一・一〇）。

#### 付記

本稿は台日「文学と歌謡」国際シンポジウム（二〇一六年六月四日、於国立台湾文学館）、並びに広島芸術学会例会（二〇一六年一月一七日、於サテライトキャンパスひろしま）での口頭発表をもとに加筆訂正を行ったものである。会場内外においてご意見を下さった方々に深謝申し上げます。

（しもおか ゆか、広島大学大学院文学研究科准教授）

### 別表1 黄霊芝「自選百句」(2015)初出・既出一覧

俳句集 = 『台北俳句集』1集(1971年)～ 43集(2015年)

作品集 = 『黄霊芝作品集』巻2(1971年)、巻6(1982年)、巻15(2000年)、巻18(2000年)、巻20(2003年)

合同 = 『侯鳥霊芝合同俳句集』(1984年)、歳時記 = 『台湾俳句歳時記』(2003年)

40周年 = 『台北俳句会 40周年記念集』(2010年)

注：五・七・五単位での異同のある場合には※を付した。

	俳句集	作品集	合同	歳時記	40周年
1 初蟬に雨、雨、雨、雨		20			○
2 蟬閉ざす教室の窓一、二、三、四、五...		20※			○※
3 さ丹塗りの頬は役者や帝雉		15		○	○
4 山さ来て蟬なん知らぬギター掻	21	20			○
5 雪を見にピアスをつけに戻ってまで	38, 41				
6 穴ん者は蟬の遺跡や日の盛り		20			○
7 仙公生信徒はカメラ揚げをらず	22	15		○	○
8 一丁目一番地 大鉄門に御所桜					○
9 表門ブーゲンビリア裏備へイカダカズラ				○※	
10 葉膳の当帰はセリ科花の冷					○
11 鮫鱈に出刃一刀流を振り下ろす					○
12 蠶や古都は廓の早仕舞	24	15		○	○
13 媛らみて岬は神代かはらけ菜	26	15		○	○
14 粗塩に鯖を焼きくれ姉御なり	25	15			○
15 小焚火にいつも来てゐる亡いあなた	24	15			○
16 裸木の鉄となりゆく唄の風	25	15			○
17 姫ひぐらし鳴かせて古都の深庇	24	15, 20			○
18 猫御前のそろそろ秋刀魚食ひ残す	37, 38				
19 八階へ上がって行ったエレベーターがなかなか十二階から降りて来ない		6			
20 父ちゃんじゃないんだってば守宮の死					
21 盲人とすれ違った蝶にも蝶とすれ違った盲人にも一瞬があった		6			
22 岩ありて蟬みて芭蕉どこかに居		20			○
23 深草少将といひ蟬といひ	31	20			○
24 どの蟬も枝に命中して止まる	31	20			○
25 耳に蟬マラソン走者走らねば	31	20			○
26 飛ぶ蟬の三八式銃ほどの距離	31	20			○
27 蟬一日休暇の町の疲れたる		20			
28 かなかなや帰りを急ぐ日雇女	31	20			○
29 ひぐらしや娶りの村の夕長き	31	20			○

30	花疲れ姑疲れ峠茶屋	20	15			○
31	長いものおじゃるで峠気いおつけ				○	
32	あぶら蟬標高二千といふ森閑		20※			
33	男ゐて呼べばキツネや峠茶屋					
34	蟬幾世逢ふさ離るさの古参道	21※			○※	
35	御社とあれば蟬麻呂朝臣ゐて		20			○
36	貯水タンク換へて別荘夏はじめ	13	15	○		
37	島に紫蘇野生えて戦史はるかなる		2	○		
38	タイヤルの村はもうすぐ桜蘭	23	15		○	
39	魔の谷へ男いざなふ月桃花				○	
40	水仙会大人よりは夫人の駕	28			○	
41	豪邸の門神夙に身拵へ	27			○	
42	大道公生替女の静かは耳一途	28			○	
43	父無しの泣寝入りぐせ王爺祭	20※	15※		○	
44	後干泣く子となりゆけり船を焼く		20※		○	
45	春聯を書く達筆の男前		15		○	
46	天公炉吊す本家の梁太し	32				
47	ガーリック洋語は臭くなかりけり					
48	亡き父と居れば城址のかぎろへる	3	6	○		
49	紋黄蝶追へば修道女も乙女	6	6	○		
50	遠雷に明るき鏡眉を引く	1	2	○		
51	妻に妻戻す遠雷川遊び	3	6	○		
52	男らに村議のつづく粟の秋				○	
53	深梅雨に明日を占ふ陰陽師	5	6	○		
54	竈食する御坊溜り基隆雨	24※	15※			
55	犬を轆く春宵一刻千金子	13	15	○		
56	新婚の耳輪小重き花曇		2※	○		
57	みそかごとありがた翁はぶ屋の午	25	15		○	
58	センノサイド千錠入 ままよ颱風兆す					
59	へべれけの蒜臭きお説教	20	15			○
60	神豚も義民の裔も福の相					
61	ひょっとこの顔して金魚値べらぼう	38				
62	蟻せせる所帯もつとは吾娘貧し	34				○
63	赤を貼る袖の女房商家の出	37				
64	入婿も蟬もなかなか夕暮れず					
65	難産の蟬と力みてゐて凡夫	31	20			○

66 満月の潮がまさぐる岩の恥部	6	6	○		
67 糸瓜にも大器晩成鳥渡る	4	6	○		
68 普請場にブルはブルどち懐手		6			
69 年越しの老の一卓より軍歌	37				
70 ヤゴの名は知りゐて書けず村起し	38, 41				
71 同郷の鮭屋といへばいつもそこ	38, 41				
72 四月馬鹿ししゃもはオスも身籠れる					
73 爽やかかやあの子もこの子も巢立ちます					
74 蟬の脱ぐ闇の彼方の一舞台		20			
75 茶毘に付す稲藁人に頭を下げよ					
76 瘦田に早もつとも佇めり	3	6	○		
77 見ば拾ひ拾はば探し...浜の栗					
78 榕の根を崖に一刹夏籠り	6	6	○	○	
79 石研るや谷彦秋の二千尺	10				
80 あきつ翔ぶ町に日曜来る度に	13	15	○		
81 阿蘭若に日々草の饒舌な		18			
82 『書・牧誓』山家居留守にして日長		6	○		
83 円高のまだまだつづき日の短か	18	15			
84 新妻にパン粉ふくらむ冬日射	17	15			
85 矢じるしも楷書なりけり孔子祭	34				
86 待たせぬどこかの誰か炊飯花		15			
87 裏市は地鶏の修羅場年迫る	37※				
88 仕舞屋の端午が来れば粽売る	37※				
89 町なかの雨後に天ありつばくらめ		6	○		
90 里訪うて香肉旨き二度おぼこ	21	15		○	
91 煮凝は軍鶏の健脚寿の祝	38※				
92 塵労の貌を写して水澄めり	16	15			
93 大袈裟は重々承知羽蟻万					
94 およすげの含み笑みして鯉売って	28			○	
95 夜を起きて衣重ぬれば亡母在りぬ	9	15	○		
96 塩魚曳く網疵痛き寒早		2	○		
97 ひそかなるものに芽、芽、喪	7※	6	○		
98 颯去りて林の奥の奥に人	5	6	○		
99 上つ文文箱に薺女子が目	10	6	○		
100 寒雀寒銅像にお相伴	32				

別表2 季語の分布

( )の数字は掲載順をあらわす

年末年始	寒い頃	涼しい頃	暑い頃	あたたかい頃	
門神 (41), 春聯 (45、63), 天公炉 (46)	雪見 (5), イカダカズラ (9), 霾 (12), 蒜 (47、59), 基隆雨 (54), 香肉 (90)	秋刀魚 (18), 粟の秋 (52), 孔子祭 (85), 炊飯花 (86)	長いもの (31), 桜蘭 (38), 月桃花 (39), はぶ (57), 義民 (60), 榕 (78)	帝雉 (3), 仙公生(7), かはらけ菜 (13), 鯖 (14), 水仙会 (40), 大道公生 (42), 王爺祭 (43、44)	台湾季語
年越し (69), 年迫る (87), 薺 (99)	鮫鱈 (11), 焚火 (15), 裸木 (16), キツネ (33), 懐手 (68), 日短 (83), 冬 (84), 煮凝り (91), 重ね着 (95), 寒旱 (96), 寒雀 (100)	かぎろい (48), 台風 (58、98), 月(66), 爽やか (73), 稲 (75), 栗 (77), 秋 (79), あきつ (80), 水澄む (92)	蟬 (1、2、4、6、17、22、 23、24、25、26、27、28、 29、32、34、35、64、65、 74), 守宮 (20), 夏 (36), 紫蘇 (37), 遠雷 (50、51), 深梅雨 (53), 金魚 (61), ヤゴ (70), 鮪 (71), 早 (76), 日々草 (81), 端午 (88), 羽蟻 (93)	桜 (8), 花の冷 (10), 蝶 (21、49), 花疲れ (30), 春宵 (55), 花曇 (56), 蝻 (62), 四月馬鹿 (72), 日長 (82), つばくらめ (89), 芽 (97)	日本季語
新年	冬	秋	夏	春	